

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第66回

## 9.11同時多発テロ事件から20年の今・世界を考える

日時：2022年1月26日(水) 18:00~19:30

会場：感染症拡大に伴いオンライン（Zoom）にて

主催：同志社大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科

共催：ヒューマンディグニティ研究センター、フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センター

---

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第66回の今回は、グローバル・スタディーズ研究科教授内藤正典氏と高崎経済大学経済学部准教授三牧聖子氏のお二方をお迎えし、『9.11同時多発テロ事件から20年の今・世界を考える』と題して、ご講演いただきました。

お二方の講演の前に、本講演会の司会のグローバル・スタディーズ研究科教授の岡野八代氏から今回の企画意図について説明がされた。まず、9.11が岡野氏に与えた影響について語られた。9.11の事件がご自身の研究領域である西洋政治思想史を見つめ直す契機となったという。そして、66回続くセミナー「グローバル・ジャスティス」を導入する動機の1つが9.11であったことが語られた。当セミナーは、9.11以降の世界における「正義」について共に考えるために始められた。そういった経緯もつこのセミナーにて、今回はイスラムとの共存について長年研究されている内藤氏とアメリカ外交史・国際政治史をご専門とされる三牧氏を招き、9.11から20年後の今についてそれぞれの視点から語っていただくこととなった。

まず、内藤氏によるレクチャー「イスラムから世界を見る～アフガニスタンからヨーロッパまで～」というタイトルで行われた。このレクチャーでは、イスラムと西欧の世俗的思想はいかに「水と油」の相容れない関係であるか、そういった共約不可能な関係であるということを前提に暴力や啓蒙の圧力に頼ることのない形で共生を図ることの重要性について語られた。主に3つのポイントから語られた。1点目は、タリバンは何をしたいのか？この部分では、西欧諸国のメディアによる誤認に基づいたタリバン政権の報道の問題性などに触れながら、実際のタリバンがアフガニスタンの歴史の中で果たしてきた役割やタリバンが目指そうとしていることをアフガニスタンの視点から語られた。2点目は、タリバンと女性の関係について語られた。ここでは、タリバンが女性についてどのような考えを持っているかということが明らかにされた。タリバンは、女性は奉仕され、男性は奉仕する存在であるといった考えを持っており、こういった女性に対する考えが西欧諸国では受け入れられ

ないことを理解している。3点目は西欧とタリバンの関係について語られた。イスラムフォビア（イスラム嫌悪）がタリバンに対する誤認を生んでいること、そして、近年のEU諸国における難民政策、移民排斥の動きがいかに関係を正当化させるものであるかということを示唆した。最後に、そういったお互い相容れない関係の間で共生を図るには、お互いの土台の何が違うのか？ということ対話を通じて理解するほかないということ締め括られた。

次に、三牧氏によるレクチャーは「終わらない『テロ』との戦い」というタイトルで行われた。三牧氏のご専門であるアメリカ外交史・国際政治史の視点から9.11が語られた。主に、5つのポイントに分けて説明された。1点目は、終わらない「テロ」との戦いということで、米国兵士は犠牲にせず遠隔地から監視と攻撃を行う作戦「over the horizon」が取り上げられた。とりわけドローン攻撃の非人道性が見過ごされていることについて言及し、それがテロとの戦いを永続化させていると指摘された。2点目は、誰が記憶され誰が忘れ去られているのかということで、記憶の問題性が提示された。アメリカにおいて9.11は「追悼」というところが強調されてしまい、戦争自体の歴史を振り返り「内省」するということが出来なくなっていることの問題性が提起された。3点目は、米国が掲げる人権の問題性を指摘した。米国の人権政策は非常に狭く政治的・市民的自由によるものであり、社会的・経済的権利を軽視するものであるということをタリバンに抑圧されたアフガン女性を「救う」という帝国主義的フェミニズムの問題性を例に挙げながら説明された。4点目は3点目で挙げられたアメリカが掲げる人権の問題性（帝国主義的フェミニズム）を批判的に見る若い世代(ラナ・アブデルハミッド氏)の台頭に希望があることが示唆された。9.11の精算はまださまざまな意味で終わっていない状況下で、新たなプログレッシブの形としてインターセクショナルリティを理解するリーダーが必要であると論じられた。5点目では実際にアフガニスタンで活動をしていた中村哲氏によって語られた言葉がいくつかシェアされた。「現地の人々の立場に立ち、現地の文化や価値観を尊重し、現地のために働くこと」という中村氏の言葉でレクチャーを終えた。

レクチャーの後、質疑応答の時間が設けられた。岡野氏から安全保障を武力に頼っていることの問題性が挙げられ、武力に頼らない形での安全保障のアプローチはどのようなものが考えられるかという質問がなされた。内藤先生は、市民同士の対話を続けていくことの重要性を強調された。三牧先生は、内藤先生が指摘された市民同士の対話の重要性に同意をされた。そして、若い世代の介入の重要性を指摘した。アメリカが他国の軍事介入に力を注いだ結果、国内の政治が混乱したことを指摘し、なぜこんなにも国内の政治が混乱してしまったのかという原因を探る若い世代が台頭していることが希望であると答えられた。

文責 西澤麻里香